

■静岡県立美術館 自己点検評価表(展覧会)(平成24年度)

事業名称	「静岡県立美術館収蔵名品選 カラーリミックス」展
企画(事前)	
目的・内容	2500点を越える静岡県立美術館の収蔵品の中から、「色」をテーマに、古美術から現代アートまで選りすぐりの名品約90点を紹介する。日本画、西洋画、現代アートといったジャンル別でなく、色の効果という視点から再編集し、ジャンルを横断した意外な組み合わせの展示により、作品の新鮮な味わい方を提案する。
期待される成果	特殊照明による光と影の変化を楽しむコーナーや、畳に座って屏風を鑑賞するコーナーなど、鑑賞者がいつもとは違う鑑賞を楽しむことができる仕掛けを作り、鑑賞体験が印象に残る仕掛けをつくることで、話題性が高まる。色の効果に着目した作品解説、ホームページでの作品の紹介コーナー、学芸員のフロアレクチャー、解説シートなどを通じて、所蔵品に親しんでもらうことができる。
指標(数値目標)	観覧者数 14,000人
収支(予算) /観覧者数(見込)	・観覧者数 14,000人 ・歳出 6,002千円 ・歳入 4,489千円 ・特財率 74.8%
広報戦略	・若者をターゲットにした展覧会タイトル、チラシ、ポスターデザインを採用した。 ・4月に大学に向けた広報を友の会と共に、市内5大学(静大 県大 常葉大 東海短大 英和大)に向けて行った。 ・小中学校へのお知らせを、例年に比べ、早く動いた。 ・展覧会オープンに合わせて、雑誌スローライフに特集記事を掲載した。 ・トークフリーデーを新たに設定して、話題づくりを行う。

部署	学芸課	記入日	企画 平成24年4月1日
担当者名	川谷、大原、三谷、角田		総括 平成24年7月25日
実施日・場所	4月14日(土)～5月27日(日) 静岡県立美術館第1～2展示室		

学芸員の企画への参加の有無	○有 ・ 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	作品選定、作品解説等
マスコミ等による共催の有無	有 ・ ○無	巡回の有無	有 ・ ○無

総括(事後)	
目的の達成度	入場者数は、目標の82%にとどまった。 入館者内訳:一般44.1% 70歳以上 6.4% 大・高生 18.9% 小・中生(個人)6.5%(団体)9.0% 若者をターゲットにした展覧会タイトル、チラシ、ポスターデザインを意識的に採用したが、結果、若者の比率が、同様の展覧会と比較して2倍ほど高く、一般ととくに70歳以上が伸びなかった。観覧者の反応は、おおむね好評で、色をテーマにした点が美術館になじみのない若者にもとっつきやすかったようだ。多様なジャンルの作品を一度に鑑賞することができた点も言われた。照明の変化や量敷き空間の評判が高かった。
アンケートにみる特徴	
指標に基づく成果	観覧者数 11,573人(82%)、作品やテーマに興味を持った人の割合 %
研究活動評価委員会からの意見(要約)	鑑賞者は、年代を超えて、収蔵品の各ジャンルを超えた展示に何かを感じることが出来たであろう。作品の持つ新しい魅力を引き出し、見つめなおす、企画は成功している。ただし、おのずと限界がこうした方法では生まれてくるので、それを乗り越える工夫が要求されるだろう。
収支(決算) /観覧者数(実績)	・観覧者数 11,573人(目標 14,000人: %) ・歳出 2,227千円(予算 6,002千円: %) ・歳入 3,134千円(目標 4,489千円: %) ・特財率 140.7%(目標 74.8%)
今後の改善点・課題	若者の比率は、同様の展覧会と比較して高かったが、当館のコアファン層の、一般、とくに70歳以上が伸びなかった事が目標人数に届かなかった要因といえる。想定内の結果といえるが、このことから、あらゆる層を一度に惹きつけることは難しいということ改めて確認した。美術館のコアファン層だけでなく、幅広い層に美術館に興味を持ってもらうために、今後は、ターゲットを絞り込んだ企画展(広報の手法も含め)に挑戦していくことが必要ではないだろうか。団体観覧の大学からのレポートを分析すると若い人が好む作品の傾向がはっきりと出ており、印象に残った作品や好きな作品の欄に、現代作品が多くあげられていた。嵯峨篤《Repose/009-017》、正木隆《狭山》、草間彌生《水上の蜚》、伊藤若冲《樹花鳥獸図屏風》など。会期中、ツイッターへの書き込みが多くあったことから、新聞やテレビといった従来の広報媒体だけでなく、インターネットを活用した広報展開も展覧会のタイプに応じて力を入れていく必要がある。例)ブログや、写真撮影コーナー、ネット上のイベントなど。

■静岡県立美術館 自己点検評価表(展覧会)(平成24年度)

事業名称	「日本油彩画 200年～西欧への挑戦～」展
------	-----------------------

企画(事前)	
目的・内容	当館コレクションを核として、一部他館所蔵品を加えて、日本の近代油彩画史を概観する。日本人がなぜ、油彩画を描き、また描き続けてきたのかを作品を通して考える機会とする。近世から明治、大正、昭和期までの日本人の油彩画を展示・紹介する。かつて教科書でみた黒田清輝、佐伯祐三、岸田劉生などの作品を改めて実際に見てもらい作品を見る面白さを実感してもらおう。
期待される成果	当館コレクションを多くの鑑賞者に鑑賞してもらうことで、美術館におけるコレクションの重要性を啓蒙・普及することができる。そのことが、これからの美術館の在り方を検討するための素地となる。
指標(数値目標)	観覧者数 10,000人
収支(予算) /観覧者数(見込)	・観覧者数 10,000人 ・歳出 7,013千円 ・歳入 3,275千円 ・特財率 46.7%
広報戦略	22特定のマスコミとは連携せず、広く多様なマスメディアとの連携を実施する。できる限り多くのマスコミ、商業施設、また大学等の教育機関との連携を模索する。

部署	学芸課	記入日	企画 平成24年4月1日
担当者名	森井、村上、角田		総括 平成24年7月24日
実施日・場所	6月9日(土)～7月22日(日) 静岡県立美術館第1～6展示室		

学芸員の企画への参加の有無	有 ・ 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	作品選定、図録執筆、作品解説等
マスコミ等による共催の有無	有 ・ 無	巡回の有無	有 ・ 無

総括(事後)	
目的の達成度	当館コレクションを通じて、日本の油彩画史を概観することができた。また、鑑賞者には、日本人がいかに西洋伝来の油彩画と格闘、葛藤し続け、江戸から今日に至るまで約200年の間、油彩画に取り組んできたのかを実作品を通して示すことができた。鑑賞者の滞留時間も長く、じっくりと作品鑑賞してもらえたと考えている。また当館コレクションに加えて、近隣の公立美術館からも作品を借用することができ、油彩画通史に幅を持たせ、充実させることができた。
アンケートにみる特徴	
指標に基づく成果	観覧者数 8,486人
研究活動評価委員会からの意見(要約)	こうした日本洋画の回顧は、県立美術館として必須不可欠な展覧会である。作品数、作家数とも会場にふさわしく、コンパクトながらよくまとまっており、満足できる内容である。(金原委員)
収支(決算) /観覧者数(実績)	・観覧者数 8,524人(目標 10,000人: 85.2%) ・歳出 5,075千円(予算 7,013千円: 72.3%) ・歳入 2,792千円(目標 3,275千円: 85.3%) ・特財率 55.0%(目標 46.7%)
今後の改善点・課題	近世部門に、司馬江漢だけではなく、平賀源内、亜欧堂田善、また明治期に高橋由一、昭和期に松本竣介などを加えることができなかったが、これらの作家が加わることで、通史はさらに充実したと考えられる。また、日本油彩画の最重要作家である黒田清輝を借用作品に頼らざるを得なかったことは、今後の当館収集の大きな課題である。広報においては、特定のマスコミとの連携は、図らず、逆にその効果として、新聞の全国紙やテレビ全国版で取り上げられた。静岡大学との連携を図り、大学生ギャラリートークを実施した。今後は、さらに当館コレクションの魅力と内容が伝わるような広報手段を検討したい。

■静岡県立美術館 自己点検評価表(展覧会)(平成24年度)

事業名称	ユベール・ロベール 18世紀フランス画家が描いた自然と人工、現実と空想、過去と未来
------	---

企画(事前)	
目的・内容	18世紀フランスの画家ユベール・ロベール(1733-1808)の芸術を、17~18世紀に活動した他の画家の作品と共に紹介し、ロベールとその時代の絵画の魅力に触れてもらう。出品作品は、ヴァランス美術館(南フランス)の所蔵品を中心とする130点。
期待される成果	①風景画コレクションの充実に努める当館に相応しい企画展であり、当館所蔵作家ロベールの芸術を知ってもらう貴重な機会である。②収蔵品のロベール作品の位置づけを、明確にすることができる。③国立西洋美術館との学術交流を基本として成立する共同企画展であり、今後の両館の友好関係を深めることが期待される。
指標(数値目標)	観覧者数 19,000人
収支(予算)/観覧者数(見込)	・観覧者数 19,000人 ・歳出 18,228千円 ・歳入 10,878千円 ・特財率 59.7%
広報戦略	当館独自の広報に加え、名義共催である静岡朝日テレビのテレビ・スポット、中日新聞の紙面における広報。

部署	学芸課	記入日 平成25年3月1日	企画 平成24年4月1日
担当者名	小針、三谷		総括 平成25年3月1日
実施日・場所	8月9日(土)~9月30日(日) 静岡県立美術館第1~6展示室		

学芸員の企画への参加の有無	有	無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	図録エッセイ執筆、作品解説等
マスコミ等による共催の有無	有	無	巡回の有無	有

総括(事後)	
目的の達成度	ユベール・ロベールの芸術ならびに先輩画家・同時代画家については、展示だけでなく、講演会、講座、フロアレクチャーを通して、概ね要点を伝えることができた。ロベールが得意としたカブリッチョ絵画が、18世紀西欧の芸術的嗜好をよく反映していたことも示せたと思う。今回の展覧会を開催したことで、当館所蔵のロベール作品の位置がよく判ったことも収穫のひとつと言いたい。さらに共同企画者である国立西洋美術館とも、良好な関係を築けたことを付記しておきたい。
アンケートにみる特徴	・来館者の男女比は4:6であった。 ・新規来館者は、夏休み期間中のため、10代、20代が多く、合わせて47%を超えた。 ・新規来館者では「県外」が最も多く、37.7%と4割弱を占めた。 ・満足度は「はい」(65.8%)と「どちらかというはい」(27.6%)を合わせ、93%を超えた。
指標に基づく成果	観覧者数 13,541人(71.2%) 作品やテーマに興味を持った人の割合 87.0%
研究活動評価委員会からの意見(要約)	★[坂本委員] 18世紀ロココ絵画の中で、新古典主義やロマン主義を準備するジャンルの一つは「廃墟画」である。その代表的画家ユベール・ロベールのこれだけの規模の展覧会は、日本では初めてである。木造建築の日本では、「廃墟」の概念が全く異なるという点でも、この展覧会の意義は明らかである。★[瀬江委員]全貌を見る機会がなかった画家の画業の紹介であり、その独自性、先駆性は言うまでもない。しかも、風景画の美術館としての静岡県立美術館にふさわしい企画である。儲かる展覧会に走りながら今時の展覧会事情からすると、その規格の大胆さ、内容の充実ぶりからも高く評価できる。
収支(決算)/観覧者数(実績)	・観覧者数 13,541人(目標 19,000人、71.2%) ・歳出 16,665千円(予算 18,228千円、91.4%) ・歳入 7,801千円(目標 10,878千円、71.7%) ・得財率 46.8%(目標 59.7%)
今後の改善点・課題	<展示>カブリッチョ、サンギーヌに対する解説が不足していた。静岡会場だけでも、解説を追加する方がよかった。素描への照度制限(50ルクス)を受けた展覧会であったが、照明調整を請け負った業者が不慣れなため、作業にかなり手こずった。<企画>展覧会自体は、展覧会カタログと共に、良い出来栄であったが、事業の収支バランスには問題を残した感がある。<広報>静岡朝日テレビに名義共催を引き受けてもらったが、このやり方だと、他の展覧会と同様、十分な広報力を得るには至らなかった。

■静岡県立美術館 自己点検評価表(展覧会)(平成24年度)

事業名称	「江戸絵画の楽園」展
企画(事前)	
目的・内容	<ul style="list-style-type: none"> ・屏風、掛軸、画帖といった日本絵画の多様な形態に注目し、作品本来の機能や干渉の様態、さらにそうした形態が業者内容といかに関わっているかについて紹介する。 ・上記をとおして、「作品」である以前にまず「もの」としての絵画のありかたについて理解を深めていただく。 ・当館所蔵品に加え、多くの新出・初公開作品を交えて構成することで、近世絵画の魅力を多角的に紹介すると同時に、学術的にも意義のある展覧会とする。
期待される成果	<ul style="list-style-type: none"> ・作家や主題以前の、「かたち」を切り口とすることで、幅広い観覧者層に日本美術の魅力を理解していただくことができる。 ・多くの重要作品を新たに紹介することで、学術的にも大いに貢献することができる。
指標(数値目標)	観覧者数 13,000人
収支(予算) /観覧者数(見込)	<ul style="list-style-type: none"> ・観覧者数 13,000人 ・歳出 8,671千円 ・歳入 4,466千円 ・特財率 51.5%
広報戦略	<ul style="list-style-type: none"> ・マスコミ共催ではなく、広報費も限られているため、内容の充実度を売りとして新聞社等に直接資料を送り、記事として取り上げていただけるようにする。 ・一部の作品については、報道記事に載せるようはたらきかける。 ・固定の古美術受容者を取りこぼさないことはもちろんだが、若い世代にも訴えかけ得る魅力的なポスターデザイン等を検討する。

部署	学芸課	記入日	企画 平成24年4月1日
担当者名	福士		総括 平成24年12月12日
実施日・場所	10月7日(日)~11月18日(日) 静岡県立美術館第1~6展示室		
学芸員の企画への参加の有無	有 ・ 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	作品選定、図録執筆、作品解説等
マスコミ等による共催の有無	有 ・ 無	巡回の有無	有 ・ 無

総括(事後)	
目的の達成度	<ul style="list-style-type: none"> ・展示の構成、図録の編集方法において工夫を凝らし、表裏も含めた鑑賞の視点を提供することができた。 ・分かりやすい解説を心がけ、広く一般の鑑賞者が楽しめる展覧会とすることができた。 ・新出作品の掘り起こしに努めたことで、学術的な意義も有する展示となった。 ・館蔵品をバランスよく配置し、新出・初公開作品のなかでコレクションの重要性を改めて示すことができた。 ・観覧者数は目標に達しなかったが、目標の8割を超えたことは、マスコミ共催でない単独展としてはまずまずの結果であったといえる。
アンケートにみる特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・県内のリピーターを中心とした、従来の古美術ファンが多かった。 ・県外からの新規来館者が多かったのは、一般的な古美術展としては特徴的といえる。 ・マスコミ共催でないにも関わらず、新聞やテレビをきっかけとして来館した観覧者が一定数いたことは、パブリシティがある程度の効果をあげたものと考えられる。
指標に基づく成果	観覧者数 10,758人(82.8%)、作品やテーマに興味を持った人の割合91.3%
研究活動評価委員会からの意見(要約)	<ul style="list-style-type: none"> ・コンセプトが明快であり、また箱を展示するなどこれまでにない工夫が試みられ、分かりやすい。新出資料を含め、興味深い展覧会となっている。(金原) ・作品を「もの」として見るという、日本の絵画に対する新しい見方を提示した点、高く評価したい。明快なコンセプト、それを作品展示で具体化する一作品選定の見事さ、新出作品の提示もなおざりしない一年度最も野心的な展覧会だと思う。(榊原)
収支(決算) /観覧者数(実績)	<ul style="list-style-type: none"> ・観覧者数 10,758人(目標 13,000人: 82.8%) ・歳出 7,218千円(予算 8,671千円: 83.2%) ・歳入 3,887千円(目標 4,466千円: 87.0%) ・特財率 53.9%(目標 51.5%)
今後の改善点・課題	<ul style="list-style-type: none"> ・紙幅、予算の制約が大きかったが、作品ラインナップやテキストももう少し考察を深める余地があったと感じている。 ・朝日新聞、日曜美術館アートシーンなどを通じ、全国への情報発信ができたことは、事前の広報戦略が功を奏したものと見える。ただ、日経新聞など引きがありながらも記事掲載にいたらなかった事例もあり、いかに説得力のある広報資料を作成していくかについては今後の検討が必要であるとする。

■静岡県立美術館 自己点検評価表(展覧会)(平成24年度)

事業名称	「マチュピチュ」発見100年 インカ帝国」展
------	------------------------

企画(事前)	
目的・内容	14世紀からわずか1世紀の間に、現在のコロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビア、アルゼンチン、チリ等に発展したインカ帝国について、その全貌を初めて紹介するものである。これまで、ミイラや都市、出土した土器など、個々の事柄についての展覧会はあったが、帝国が全体としてどのようなものであったのか、それに取り組むのは、本展が最初である。人類学、考古学、歴史学、三つの視点から、この大きなテーマに光を当て、最新の3D映像も交えてご覧頂く。
期待される成果	映像と組み合わせた展示は、展示資料だけでは伝わりにくい大きな枠組みを、より効果的にお伝え出来るであろう。それは年齢、性別を問わず、幅広い層にアピール出来る。東京会場(国立科学博物館、上野)は最終的に45万人を超える入場者、仙台会場は開会後10日目に1万人を数えた。
指標(数値目標)	観覧者数 71,000人
収支(予算)/観覧者数(見込)	・観覧者数 71,000人 ・歳出 19,706千円 ・歳入 26,732千円 ・特財率 135.7%
広報戦略	見る者に強力なインパクトを与えるミイラのイメージを、必要に応じて適宜用いる。本展はインカ帝国の全貌についての展覧会であって、その一部都市であるマチュピチュについてはメインではない。この点は誤解の無いように強調しつつ、「神秘の都市遺構 マチュピチュ」についても、興味を喚起する話題を提示する。

部署	学芸課	記入日	企画 平成24年4月1日
担当者名	新田、南		総括 平成25年3月31日
実施日・場所	11月27日(火)~1月27日(日) 静岡県立美術館第1~6展示室		

学芸員の企画への参加の有無	有 ・ 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	
マスコミ等による共催の有無	有 ・ 無	巡回の有無	有 ・ 無

総括(事後)	
目的の達成度	左記の目的は、十分達成されたと考える。当会場は東京会場に比べても広がったため、展覧会に合わせて製作された展示ケースを十分に活用することが出来た。3Dシアターは勿論のこと、各所に設けた映像による解説は、来館者の興味を引き、理解を促すのに効果的だった。会場の構成は、観覧者数の増加を見込んで行ない、必要に応じて修正を加えていった。
アンケートにみる特徴	
指標に基づく成果	観覧者数 99,411人(140.0%)
研究活動評価委員会からの意見(要約)	
収支(決算)/観覧者数(実績)	・観覧者数 99,411人(目標 71,000人: 140.0%) ・歳出 19,689千円(予算 19,706千円: 99.9%) ・歳入 45,434千円(目標 26,732千円: 170.0%) ・特財率 230.8%(目標 135.7%)
今後の改善点・課題	ロタン館前道路使用不可、駐車場の減少という大きな障害があったが、総務課等に管理班の努力により、改善が進められた。今後の大規模展に備え、方法の蓄積が望まれる。当館施設は本来、本展のような大規模な観覧者数には対応していない。それが駐車場の不足をはじめ、空調等への大きな負荷となって現れている。これは、観覧者数が増える一つの展覧会に集中すれば、資料にとっても人間にとっても、環境が容易に悪化することを意味する。この美術館のハードとしての許容範囲をよく確認した上で、年間のスケジュールを策定していく必要があると考える。

■静岡県立美術館 自己点検評価表(展覧会)(平成24年度)

事業名称	「維新の洋画家-川村清雄」展
------	----------------

企画(事前)	
目的・内容	<ul style="list-style-type: none"> ・日本近代洋画の先駆者の一人・川村清雄(1852-1934)、徳川家達とともに静岡にやってきた幕臣の出である川村は、静岡ゆかりの画家として当館にも重要作品が収蔵されている。本展は、川村家から大量の文書・遺品類の寄贈を受けた江戸東京博物館と共催する大回顧展であり、20世紀末から再評価のうごき著しい川村清雄の全貌を紹介する。 ・同博物館との共同研究の成果を元に、その作品と人物像に迫る展示で、学術的にも充実した作品・資料群を紹介する。
期待される成果	<ul style="list-style-type: none"> ・《建国》(バリ・ギメ美術館)、《形見の直垂》(東京国立博物館)といった貴重な作品を巡回させ、美術館として上質な展示を目指す。 ・同展は歴史系博物館とのコラボレーション。通常、パッケージの文明展以外では美術館では扱うことの難しい文書類や甲冑などの遺物類をも共同研究の成果として紹介し、幕臣・川村家の歴史を示す。また、幕末から明治大正を経て昭和に至る、画家の生きた時代の空気を紹介する。
指標(数値目標)	観覧者数 15,000人、作品やテーマに興味を持った人の割合70%
収支(予算)/観覧者数(見込)	<ul style="list-style-type: none"> ・観覧者数 15,000人 ・歳出 14,309千円 ・歳入 7,687千円 ・特財率 53.7%
広報戦略	<ul style="list-style-type: none"> ・《建国》は日本人画家川村清雄の手になりながら、フランスの美術館に直接取ったまま日本でお披露目されたことなかった「里帰り作品」である。第一テレビの電波による広報では、この作品の貴重さと華やかさをアピールしたい。 ・徳川家達に側近く仕えた川村清雄の展示であり、家達関連の資料も多く出品される。静岡の近代史の一コマを紹介する歴史展の要素もアピールしたい。 ・静岡に先立って行われる江戸東京博物館展は広報に膨大な資金投入がなされる。「東京でも注目されている大展覧会」というニュアンスを静岡の県民にも伝えるようにしたい。

部署	学芸課	記入日	企画 平成24年4月1日
担当者名	村上、泰井		総括 平成25年3月31日
実施日・場所	2月9日(土)~3月27日(水) 静岡県立美術館第1~6展示室		

学芸員の企画への参加の有無	○ 有 ・ 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	作品選定、図録執筆、作品解説等
マスコミ等による共催の有無	○ 有 ・ 無	巡回の有無	○ 有 ・ 無

総括(事後)	
目的の達成度	次項にみられるように、作品やテーマに対する関心の喚起や展覧会満足度について高い水準を達することができた。学術的水準についても研究活動評価委員のコメントにみられるように一定の成果を挙げた。より一般的な評価としては、本展図録が美術館連絡協議会の優秀カタログ賞を受賞したことが挙げられ、総じて内容的には高評価の展覧会となった。一方、動員の面では目標の68.1%と苦戦している。これについては同じ展覧会が巡回した東京都江戸東京博物館でも入場者数が低調であり、目標設定自体が甘かったのかもかもしれない。
アンケートにみる特徴	「作品やテーマに興味を持った人の割合」(88.1)、「展覧会の満足度」(94.3)と内容については概ね高評価を取ることができた。来館者の特徴としては、県外来館者が少なく(7.2)、新規来館者の割合は中位(17.4)ということ、比較的当館になじみのある来館者が多かった模様である。川村清雄展の目立った特徴としては来館のきっかけ「テレビ」を挙げた人の割合の高さ(23.7)である。同年度次点の「ユベール・ロバール展」(10.5)に倍する結果となっており、アンケート諸項目のなかでもっとも顕著な特徴を示している。
指標に基づく成果	観覧者数 10,209人(68.1%)、作品やテーマに興味を持った人の割合 88.1%
研究活動評価委員会からの意見(要約)	川村清雄の画業をその出自から丁寧に作品、資料によって示し、江戸時代の徳川家周辺の文化環境にあった人物がどのように西洋文化を受容したか、また、西洋化を急ぐ社会にあつてどのような位置を占めようとしたかを浮かび上がらせた本展覧会は、日本美術の近代化の複雑性とそのあり方の多様性を明示した。歴史的観点と美術史的観点の双方をもって、共同でひとりの作家に向かうことで、内容の充実した展示となった。(山梨) (川村清雄が)「画壇」の中で逸脱的な立場にあつたらしい様子が、展覧会を見てある程度まで理解できたように思えた。原田直次郎、山本芳翠などの類似性もあるが、アカデミックな「歴史画」との格闘は、黒田に至るまで日本画家たちを悩ましたらしい。その格闘の一つの例をこの画家にも認めることができ興味深かった。(坂本)
収支(決算)/観覧者数(実績)	<ul style="list-style-type: none"> ・観覧者数 10,209人(目標 15,000人: 68.1%) ・歳出 13,236千円(予算 14,309千円: 92.5%) ・歳入 5,140千円(目標 7,687千円: 66.9%) ・特財率 38.8%(目標 53.7%)
今後の改善点・課題	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート結果からは、静岡第一テレビの広報力の高さが伺えるが、本展は学究色を打ち出した比較的生い展覧会ではあつたので、自ずから限界があつた。むしろこの広報力を、本展よりも華やかで集客力の素地が大きい展覧会に振り向けるとするのも通常の事業の組み立て方としては「あり」だったかもしれない。 ・既述のように、本展図録は美術館連絡協議会の優秀カタログ賞を受賞したが、内容もさることながら「野村デザイン制作室」を登用できたことがその要因の一つである。ただしこれは江戸東京博物館との共催でデザイン費に余裕があつたため可能だったことであり、通常の予算ではこのクラスのデザイナーを登用することは難しい。だが、デザイナーの果たす役割はそれに必要な予算に比して大きな効果をもたらしているのも事実。今後は、静岡の単独企画展であっても全国レベルの優秀なデザイナーを登用できるような予算を確保することで、静岡県美のブランドイメージの向上に寄与することができるのではないだろうか。